

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：17520469
研究課題名（和文） 明代出版史の定量的分析を可能にするための日本現存明
版書誌研究
研究課題名（英文） A Bibliographic Study of Ming Books Extant in Japan to Enable
Quantitative Analysis of the Publication History in the Ming Dynasty
研究代表者
井上 進(INOUE Susumu)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40168448

研究成果の概要：

本研究の根幹をなす日本現存明版書の調査と書誌収集については、新たに600余部の書誌を収集し、従前に蓄積されていたところとあわせ、2400余部となった。また得られた書誌を知見目録にまとめるという課題については、400部足らずにつき整理をおえ、現時点で約750部が目録稿化されている。さらに新たな知見によって旧作を補訂し、それらを著書『書林の眺望』にまとめて公刊したほか、論文や札記なども随時発表した。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2005年度 | 900,000 | 0 | 900,000 |
| 2006年度 | 800,000 | 0 | 800,000 |
| 2007年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| | | | |
| 総計 | 3,500,000 | 540,000 | 4,040,000 |

研究分野：中国近世文化史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：明版、明代出版史、出版文化、目録学、書誌学

1. 研究開始当初の背景

明代出版史の研究は、本研究開始時よりもより今日に至っても、稀少な善本に関する個別書誌の紹介や、活字本とか徽州版画といった出版史上のトピックを研究する段階にと

どまっており、この時期における出版の全体像を具体的に把握したうえで、これを分析、記述しようとした研究は、遺憾ながらまだ出現していないと言ってよい。これは研究の基礎である具体的書誌の蓄積が、今なおきわめて不十分、不完全であることの直接的反映で

あり、また旧時の伝統的版本・目録学が明版書に対してはなはだ冷淡であり、かつ近代になっても、この態度が根本的には改められることなく、通俗小説などごく一部分の明版書を除き、真剣な書誌調査を行なつてこなかったことの結果でもある。

むろん近年になれば、明版書の文物的価値が上昇し、これまで普通本として扱われてきたものもひろく善本化したことに伴い、書誌の調査とその結果の公表もおいおい進んできてはいる。たとえば王重民『中国善本書提要』(上海古籍出版社、1983)、国立中央図書館『国立中央図書館善本序跋集録』(同館・現国家図書館、1992~94)、台北・国家図書館『国家図書館善本書志初稿』(同館、1996~2000)、沈津『美国哈仏大学哈仏燕京図書館中文善本書志』(上海辞書出版社、1999)といった成果が次々と世に問われだしたのは、こうした新しい動向を端的に表現したものと云えよう。

しかしこれら中国人による研究は、すべて中国大陆、台湾、米国の蔵書を対象としたものであり、わが国に現存する膨大な量の、また質的にもきわめて優れる明版書については、まとまった研究がまったく存在していない。わが国に存する明版書がいかに重要な史料的价值を有しているかは、たとえば例外的に書誌調査の進んでいる通俗文学書のことを考えてみれば、思い半ばに過ぎるであろう。すなわち通俗文学書の研究において、わが国に現存する明版書は、本国たる中国に存するものよりもむしろ重要な意味をもっており、これを抜きにした研究など絶対に考えられないのである。

もとよりこれは突出した事例であり、すべての分野の明版書において同じことが言えるわけではないが、いずれにせよわが国に存する明版書には、他の国に伝わっていないもの

のものはなはだ多く、世界的に見て非常に貴重な存在であることは疑いない。つまりわが国に現存する明版書誌の調査、収集とその整理は、明代出版史研究の史料的基础を確立するうえで、どうしても欠くことのできないものであり、それはまたわが国の学界が解決すべき問題ともなっているわけである。

2. 研究の目的

本研究がめざす究極的な目的は、具体的な明版書誌の集積を通じ、明代出版史の定量的分析を可能とし、そのことでこの時期における出版の全体像を把握、記述するというものである。ただしこれはあくまで最終的な目的であって、期間内に達成すべき当面の目的は次の二点となる。

すなわち第一に、そうした研究を行なうための堅実な史料的基础を築くべく、これまでに収集された約 1800 部の明版書誌のうえに、さらに 6~700 部程度の書誌を加え、すべて 2400~2500 部ほどの書誌を蓄積し、その知見目録化をはかるといふこと。第二に、得られた新知見を利用して旧作の訂補を行ない、また明代出版史、特に前半期のそれに関する個別的テーマの論文や札記を著し、本研究による成果の一部を公表するといふことである。この第二の目的は、やがてなされるべき明代出版史の全面的な叙述を準備するもの、という意味をもつ。

なお第一の目的については、記録される書誌の史料的价值をより高めるため、その叙述を単なる形態的なものにとどめず、ちょうど朱彝尊『経義考』のごとく、主要な序跋などを摘録、場合によっては全録し、また必要に応じて版本や伝来などに関する考証を加えることとした。実のところこれは、従前からの方針をそのまま引き継いだもので、そのことによって得られる史料群の質的な均一性

を保とうとしたのである。また第二の目的のうち、旧作の訂補はできるだけ早い時期に一冊にまとめ、すみやかに公刊をはかることとした。

3. 研究の方法

本研究の根幹をなすものは、何よりもまず書誌調査であり、そこに格別複雑な方法論といったものは存在しない。すなわち各地の蔵書機関に赴き、未見明版書の閲覧、書誌収集につとめる、ということに尽きるわけである。しかし全体としては膨大な量になる明版書が、各地に分散して所蔵され、しかも研究の基礎として 1800 部の書誌がすでに蓄積されている現状で、ただやみくもに調査を進めるといったことはむろんありえない。つまり得られる史料群が散漫で密度が低く、系統性に乏しいものとならぬよう、調査に際しては注意深い選択を加えることが必要になるわけである。

もっとも正徳以前の明代前半期刊本に対しては、その現存数が後半期刊本と比較して格段に少なくなるため、あるものはすべて見る、という姿勢で臨むことが必要となってくるが、実のところ比較的規模の小さい蔵書のうちに、未見の版種はもうほとんどなく、調査すべきものの大半は静嘉堂文庫、尊経閣文庫、国立公文書館など、特定の大蔵書機関に集中してしまっている。

また後半期刊本についても、獲得すべき史料の密度と系統性、および調査の効率を考えれば、やはり明版書の収蔵量で日本第一、世界的にも有数である国立公文書館を中心に、上記の二機関、またお茶の水図書館（成篁堂文庫）や大倉集古館、宮内庁書陵部、国会図書館など、東京にある蔵書機関を中心にせざるを得ず、その他の蔵書機関については、版本異同の確認などのため、いわば補遺として

の調査を行なうにとどめる。なお明代後半期刊本の書誌については、その内容が散漫になることを避けるため、刊行者の明確な坊刻本、官刻本、および学術史や出版文化史的に重要な意味をもつ著作ないし版本を中心とし、刊行者の不明な本については、版本系統を探るために必要な場合などに限って調査を行なうものとする。

さらに得られた書誌の知見目録化であるが、これには版本考証や蔵印の同定を行なうことも必要であるし、また序跋や題識などの入力は、それ自体にも多くの時間がかかるうえ、誤りをできるだけ少なくするため、入念な校正も行なわねばならず、その作業量はきわめて大きい。よってこれについては、二人ないし三人の院生もしくは研究生を研究補助として雇い、比較的単純な作業は可能な限りこれにゆだねることとする。このほか、新知見を用いた個別テーマに関する論文等は、本研究の趣旨からして当然ではあるが、できるだけ明版書の実物に即した、個別的、具体的史料の積み重ねによる叙述を心がけ、実物によらぬ定性的な論断には慎重であるようにつとめる。

4. 研究成果

本研究の基本課題である明版書誌の調査と収集については、この四年間で新たに 600 余部を加えることができ、従前に蓄積されているところと併せ、累計で 2400 余部となった。この書誌調査に関する当初の見込みでは、新たに 700 部、累計で 2500 部程度が可能かと考えていたのだが、調査の重点を明代前期刊本に移したことに伴い、閲覧制限がより厳しくなり、また書誌の記録もより丁寧かつ慎重な態度で行なうようになったことから、数量的にはやや厳しい結果となった。しかし明代前半期刊本の書誌収集について言えば、今

もなお相当数の未見版本がのこっている機関は、静嘉堂と尊経閣のみとなり、日本現存の版種をほぼ全面的に把握するということが、ようやくにして現実的課題となったのは大きな成果である。また収集された書誌のうちには占める明代前半期刊本の割合が高まったことは、その史料的不いし目録学的な価値を高めたとも言えるだろう。

調査結果の知見目録化については、新たに400部足らずの整理、入力をはたし、累計で750部の目録稿が備わった。もとより400部足らずという数字は、新たに増加した書誌の7割に満たぬ部分を消化したにすぎず、大きな課題を残すこととなったのであるが、作業量の大きさが当初の見込みをはるかに上回ったため、結果としてはやむを得ないことであつたと考えている。なお現在すでに蓄積されている2400部の書誌というのは、これまでになされた書誌研究のうち、もっとも多く明版書を著録している前掲王重民著と同等の水準で、しかも王著には同版が重複して著録されていることから、版種で言えばすでに王著の著録数を抜いている。また王著は序跋などの文字を載せていないため、その史料価値は本研究に及ばず、よって本研究が潜在的にもつ意味は、すでに明版書誌研究の先端に在ると言つてよからう。

新しい知見による旧作の訂補と個別的テーマに関する論文等の執筆については、2006年に公刊した著書『書林の眺望』、および下記第五項に記した諸篇をもって、その課題をはたした。なお本研究における書誌調査は、ようやく明代前半期刊本を中心としたものになっていったが、これにより論文等も、明代前半期を扱ったものには特に意を注ぐようになった。とりわけ北京大学で発表した一篇は、幸い中国側研究者の関心を呼び、質疑応答を経た後、あらためて増訂版として北京

大学歴史系の学術誌『北大史学』に掲載することを求められた。

すでに述べたところからも明らかなように、「本研究が潜在的にもつ意味」はすこぶる大きいと考えているが、その意味を顕在化、具体化させるには、なお大きな努力が必要である。すなわち今もなお記録のままに止まっている大量の書誌を知見目録化すると同時に、さらにこれを増補した目録を公刊すること、またそのことを通じて「明代出版史の全体像」に近づく、というのが現在の課題となっているわけである。この課題をはたすためにはどれほどの時日が必要であるか、それは必ずしも分明でないが、少なくとも今後四年間は、本研究の延長線上で活動することをやめない、というのが目下の結論である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

(1) 井上 進「好むことと知ること」(『名古屋大学中国語学文学論集』20、査読有、2008、p.1~22)

(2) 井上 進「旧書筆記(九)」(『颯風』45、査読無、2008、p.55~66)

(3) 井上 進「論明代前期出版の変遷与學術」(『2008年北京論壇論文摘要集』、査読無、2008、p.597~611)

(4) 井上 進「明末の出版統制とその後」(『名古屋大学東洋史研究報告』32、査読有、2008、p.31~64)

(5) 井上 進「旧書筆記(八)」(『颯風』43、査読無、2007、p.1~34)

(6) 井上 進「文化の雅と俗」(『中国—社会と文化』21、査読有、2006、p.3~32)

(7) 井上 進「旧書筆記(七)」(『颯風』41、査読無、2006、p.111~126)

(8) 井上 進「目録学……読書の門径」(礪波護他編『中国史研究入門』、査読無、名

古屋大学出版会、2006、p.316～326)

- (9) 井上 進「読む書物、見る書物 —— 伝統中国の絵本」、(『月刊百科』512～5、査読無、2005、512号 p.26～31、513号 p.30～35、514号 p.30～35、515号 p.28～34)

[学会発表] (計6件)

- (1) 井上 進「論明代前期出版の変遷与學術」、北京論壇、2008年11月8日、北京大学
- (2) 井上 進「明代前半期における出版の変遷」、東洋史研究会、2008年11月3日、京都大学
- (3) 井上 進「明末の異人・真人」、京都女子大学歴史学公開講座、2007年5月24日、京都女子大学
- (4) 井上 進「漢籍からたどる中国の伝統文化」、第20回慶応義塾図書館貴重書展示会、2007年1月27日、丸善・丸の内本店
- (5) 井上 進「文化の雅と俗」、中国社会科学会、2005年7月10日、東京大学
- (6) 井上 進「通俗化と世俗化 —— 中国

における印刷テキストの登場」、全国大学国語国文学会、2005年6月4日、日本女子大学

[図書] (計2件)

- (1) 井上 進『増補 明代詩文』(補注解説・入矢義高著、平凡社・東洋文庫、2007、449頁)
- (2) 井上 進『書林の眺望』(平凡社、2006、413頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 進 (INOUE Susumu)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40168448

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし